

「原子力囲碁大会」事始めの頃

森 一久

20年前の1986年4月のソ連・チェルノヴィリ事故は、日本の原子力界にとって寝耳に水の衝撃であった。既に綻びが目立っていた旧ソ連体制のことであり、とりあえず「日本・西欧と全く違う炉型、兵器用Pu生産兼用で無謀な試験運転の結果」という説明で、社会への影響も最悪の事態を避けられそうにみえた。ところがそれもつか束の間、世界中に広がった放射能の実態があきらかになり、日本への輸入食品中の放射能が見つかり廃棄されるに及び、翌87年にかけ、世論は特に婦人層を中心に原子力発電反対に大きく傾斜した。そこに油を注いだのが「広瀬旋風」。「チェルノヴィリ事故は日本でも起きる」と、伊方の負荷追従の運転試験を「同じようなもの」と決め付け、け、「かわいい子孫のため原子力発電をやめさせよう」と、非科学的に扇情的に、言葉巧みに、女性の心を揺さぶった。その本「危険な話」はベスト・セラーに、広瀬隆氏の講演会は盛況という有様。あれよアレヨという間に、原子力発電についての世論調査結果も史上最悪を記録する始末。この頃原子力関係者の家族の「肩身が狭い」という訴えが、原産に寄せられたのも、開発開始以来初めてのことだった。

原産が電事連と相談して発足させた原子力側の情報センターや各社の努力は漸く始まるなか、囲碁同好の

氏と語らい、原子力関係者になるべく多く集まる

「囲碁大会」を立ち上げれば、少しは心の支えにもなりはしないか、ということになった。囲碁に目の無い私達のこと、「打つ機会を増やせば」という下心が無かったと言えば嘘になるかもしれないが、関係者の交流で心の支えを、という我々の各社への働きかけが、あの原子力のお先真っ暗の時期に、何とか賛同が集まったのは、私たち発案者の「純粋な訴え」の故、と自負する次第である

アマ囲碁界の第一人者、荏原製作所の村上文祥さんに相談したところ、諸手をあげて賛成「私も原子力屋（担当副社長）一緒に打ちたい」と言われたが、これは敬遠して審判長をお願いした。年お亡くなりになるまで毎年出席されて指導碁をうっていただいたのも今は懐かしい思い出である。。その後継は、村上さんゆ後輩の三浦浩一アマ本因坊におねがいしている。

さてこの大会は、原子力逆境の中で「引き締め」の趣旨をこめて、開始はあさ十時半とし、なるべく多くのチーム参加を願って、一チーム五人とした。当初参加チーム数は だったが、関東地域以外にも条件付で参加を認め、いまでは核燃料サイクルのメッカで強豪の青森県も加わり、 を超える参加である。その縁で同権出身の日本棋院理事長の工藤紀夫九段が毎回参加という、光栄いただいで居る。

最近、環境問題の深刻化や石油高等もあって、原子力に対する社会の眼も、少々和らいでいる。原子力関係者の方々、かつての苦い経験を忘れずに、この囲碁大会で「精神と腕」を磨き、明るい明日を期していただきたい。